

# 中井正一「委員会の論理」と コミュニケーション史の構想

中 村 保 彦

## 1. 序、本稿における課題と目的

### 1. 1 「委員会の論理」再考のために

中井正一は、1936年に「委員会の論理」を『世界文化』誌に3号続けて（1936年1、2、3月号）発表した。この論文は、未完の草稿のためか、中井が戦後に書いた文章と比べて、表現は硬く説明を尽くしていないように感じる点もあり、現代の読者にとっては難読を強いられる文章だといえる。『中井正一評論集』の編者、長田弘は、「委員会の論理」が中井の「骨格をなすエッセー」だとしながらも“明確な論理をつらぬきながら、なお大学の言葉の狭隘なありようから、その文体は自由ではない”と評する<sup>(1)</sup>。しかし、“もっとも抽象度のたかい論理の次元での思想と、もっとも具体度のたかい次元での運動とがたがいに力をかしあう方法”が「委員会の論理」に結晶したのであり、“独創的な思想はどうしてもむつかしくなるのが当然だから、読者諸君がくるみの皮のかたさにうんざりしないことを、こころからのぞみたい”<sup>(2)</sup>という久野収の思いに、筆者も共感する。「委員会の論理」が執筆された20世紀前半から21世紀が始まり、80年弱の時を経ているけれども、今なお再考する価値があると考ええる。本稿は、「くるみの皮のかたさ」に対するわずかな格闘として提示したい。

ところで、中井が36歳のときの「委員会の論理」を掲載した『世界文化』とは、どのような雑誌だったのだろうか。久野収『ファシズムの中の一九三〇年代』の注に、次のような説明がある<sup>(3)</sup>。

一九三三年の京大事件（滝川事件）の政治的敗北の後、思想的にもっと粘り強くやろうという共通の気持をもった京都を中心とする若手の学者たちの運動が生んだ反ファシズム理論戦線の雑誌。（中略）三〇年代の世界の新しい胎動（ロスト・ジェネレーション）に呼応した。三五年二

月に創刊され、三十七年十二月に官憲の弾圧によって廃刊に追い込まれる。戦前の日本の文化戦線において、唯一世界的水準を持った反ファシズム文化運動と評価される。

「日本帰郷」が台頭してくるこの時代、世界的水準を目標とし、反ファシズムの抵抗運動を繰り広げようとした雑誌が『世界文化』だった。その同人には、中井正一、新村猛、久野収らを中心として、京都の様々な学問領域の若手学者たちが結集していた。一方、『世界文化』が廃刊に追い込まれた同時期、戦時ファシズムが支配する時期に中井の京都帝国大学の先輩、三木清（1897-1945）は「構想力の論理」を『思想』（1937年5月～1938年7月）に連載を始め、「制度」の絶えず再生する神話性、フィクション性、戦時体制の人為性を論じた<sup>(4)</sup>。本稿のコミュニケーション論（史）という観点を別にして述べるなら、中井の「委員会」と三木の「構想力」、それぞれの概念には、共に京都帝国大学に学びマルクスをはじめカントやカッシーラー、ハイデッガーといった西欧思想に影響を受けた二人の思想に通底するものを感じる。ただし、本稿の問題意識の範囲外ゆえ、詳述は避けた。従来、「委員会の論理」を巡っては、多くの論者が様々な「読み」方を提示してきた。同様に、本稿の目的は、「委員会の論理」の正確な読みや正当な評価の試みというよりも、むしろ、自らの関心に即して、今どう読み込めるのかという「読み」の可能性にむけて、準備作業の提示にある。

## 1. 2 「交通」概念とコミュニケーション史

かつて、鶴見俊輔は、「委員会の論理」他の中井の諸論文には、独自のコミュニケーション史の視点があると述べた<sup>(5)</sup>。そして、その構想には、マルクス（Marx, Karl, 1818-1883）と G. H. ミード（Mead, George Herbert, 1863-1931）の影響があったと推測している。すなわち、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』（マルクスとエンゲルスが1845-46年に共同執筆）における交通形態としての思想という考え方や、ミードが『精神、自我、および社会』（原著、1934年発行）に論じた、社会成員間のコミュニケーションが内面化されたものが思想であり、外部のコミュニケーションの内面化を通して自我の意識が生まれるというモデルも影響を与えているという<sup>(6)</sup>。確かに、そ

それぞれの著作の執筆時期や発行年から考えて、中井がこれらの思想から影響を受けた可能性は否定しえない。鶴見のこのような考え方は、すでに「マルクス主義のコミュニケーション論」において論じられており、『ドイツ・イデオロギー』他、マルクスの著作に現れる「交通」(Verkehr)の概念に精神的交通も含められているとする<sup>(7)</sup>。だが、その後、現在に至るコミュニケーション論(史)の学問的な流れにおいて、交通概念が十全に追究されてきたとは言い難い。とはいえ、交通概念を起点としてコミュニケーション論を組み上げていくためには、言語、日常的な生活における身体的な行為様式、社会経済的な構造・生産諸関係、などの難問を具体的に見ていく作業が要請されるだろう。現代的な意味における“transportation”(交通)とは異なった“communication”論としての精神的「交通」概念の復権と再構築は、今後に期待するしかない<sup>(8)</sup>。

また、後藤和彦は、コミュニケーション史論への一つのアプローチとして、ホグベン(Hogben, Lancelot Thomas)、クーリー(Cooley, Charles Horton)、リースマン(Riesman, David)、加藤秀俊、イニス(Innis, Harold Adams)、マクルーハン(McLuhan, Marshall)、中井正一の七人の業績を取り上げ、中井の項に「委員会の論理」を論じている<sup>(9)</sup>。後藤によると、「委員会の論理」自体は、コミュニケーション史そのものの叙述とは異なるが、中井によるコミュニケーション史の一つの構想だと位置づけている。ただし、「委員会の論理」を「現代のリーズニング(論理)のためのコミュニケーションのタイプ」として論じており<sup>(10)</sup>、交通概念に注目する鶴見の視点とは異なっている。

なお、この「交通」概念に関しては、本来なら『ドイツ・イデオロギー』に関する文献学的な議論などを整理して辿るのが筋だが、本稿は紙幅の関係から上記、鶴見の視点や香内の整理を前提として論じる。そして、「委員会の論理」に影響を与えたと思われるマルクスやミードの思想を念頭に置きつつ、後藤が位置づけたように、コミュニケーション史の視点から「委員会の論理」を再考するための前提作業を行う。

## 2. 「委員会の論理」とその時代

### 2. 1 1930年代の世相と「自由」

「委員会の論理」が『世界文化』に発表された1936年当時、いわゆる1930年代は第一次世界大戦の「戦後」であり、機関車から軍艦にいたる国産化を目標にした。そして、ラジオ、映画、レコードなどの「ニューメディア」が副産物だった。当時の歴史的な背景は、とても現状肯定的な世相とはいえず、むしろ、大恐慌による疲弊の現実が根底的に問い直される時代だった。まず、久野収の証言<sup>(11)</sup>などを参考にしながら、この時代の世相について概観しておきたい。

久野は、当時のインテリと民衆による「自由」の捉え方の違いに言及する。歴史は沈黙の証人であって、「歴史が甦る」というとき、それは現在（1980年代）の人々が現在のインタレストから歴史を探り甦らせるのだという。そして、1980年代の国家主義と同じような位相にあった1930年代の国権主義に対する抵抗の歴史として、1933年の京大事件（瀧川事件）を例に取り上げる。さらに、京大事件における抵抗が正しかったとしても、その正しさを描写するとともに、なぜその正しさが民衆に伝わらなかったのか、賛成を勝ち取れなかったのか、というコミュニケーションの構造を問題にする。久野はこのことに関して、1980年代の時点から反省的に述懐している<sup>(12)</sup>。

ぼくが尊敬し、そしていま松尾さん（松尾尊兌）が話された恒藤教授（恒藤恭）が「総長・教授・学生」という論文で述べているように、学問・思想の自由を守るたたかいは市民的自由を守るたたかいであるという点の自覚、民衆にわかってもらえるたたかいを組む点、この両方の不足も当事者の反省として残るでしょう。（括弧内の人名補記は筆者）

マネーカルチャーとコマーシャリズムに囲まれた1980年代と違って、1930年代のインテリや民衆は、国家権力によって囲まれていた。その権力による囲い込みは、一方において束縛だが、同時に、他方において保護という側面をもつ。だが、保護されるより自由と自治を守りたいと考えていたインテリに対して、大多数の民衆は、当時も今も自由とともに保護も欲しいと考えていた。したがって、京大事件を闘った学者や久野らインテリの卵は、学問の

自由や大学の自由を国家機関の不当な干渉を排する自由と考えていたのに対して、民衆は京大事件の根本にあった学問の自由についても、国家機関の保護における、なるべく束縛のない自由と捉えていた。つまり、学者やインテリと民衆の自由の捉え方に大きなずれ違いがあったと述べている。戦前日本における市民的な自由は、わずかに職業専門人や学者、作家・芸術家の自由としてしか生きておらず、民衆の方、生活する市民の様々な自由は、名前だけであって種々の取締りに囲い込まれていた。それゆえ、学問の自由、大学の自治などという自由も、民衆にとっては大学人の贅沢な特権としか感じられなかった。

その贅沢な特権をもっていた大学人に含まれる「インテリの卵」＝学生に関連して、中井は「現代青年の思想について」という講演を1935年頃に行っている。中井は、講演を始める際に、青年の思想と時代の影響との関連を提示し、青年の思想の変化を三期に設定する。すなわち、第一期は、幕末・明治維新から明治30年（1897）頃に至る30年。第二期は、明治30年頃から欧州戦争（第一次世界大戦、1914-18）に至る20年。第三期は、欧州戦争から今（1935年当時）に至る20年。それぞれの時期における時代状況と青年の特徴を次のように述べている<sup>(13)</sup>。

（第一期）青年は、いわゆる青雲の志とでもいいますか、みずからの勉強によって、みずからの力によって、まだ硬くなっていない社会の機構に何らかの働きかけができた時代でございました。海外の知識を急速に取り入れることができさえしたら、（中略）社会的な理想も自由に吐露でき、談論風発、弊衣破帽、昂然たる意気をもって世をヘイガイしていたのでございます。

（第二期）日露戦争後に戦後恐慌がございましたが、それを乗り越えて日本は急ぎ足に外国の産業に追いつこうとしたのでございます。あたかも大正三年欧州大戦が勃発して、（中略）ドイツが経済的に特異な情勢に置かれて、イギリスより百年フランスより五十年ばかり経済情勢が送れていたのに、（中略）それを追いぬいていったのとよく似ておるのでございます。

その同じ情勢は両者に共通な情態を引き起こしております。と申しま

すのは、急激な進歩のために、一般民衆にまだその急激な進歩の足並みに歩調を合わせるができなくて、ずっと遅れた頭をもっておりものに、一方、知識をもち外国語のできる人々は外国知識を絶間なく吸収することによってその欧州一般の水準とともに進むことができたのでございます。そこで、知識人の頭と一般人の頭とが非常にかけはなれ、知識人は一般人から浮かびあがってくる情勢となってきたのでございます。これはドイツでも起こったことではございますが、日本でもこれが起こったようではございます。ドイツではこのためにイギリスおよびフランスの常識的な、実証主義的な、または自然主義的な考え方を取る道をたどらずして、理想主義的な傾向を辿ったのでございます。(中略)(ドイツの理想主義が)青年の中に一般に浸み込んできたのにはこの間何らかの関係があるように存じます。(括弧内の補記は筆者)

(第三期) 先ず彼らをまっているものは、すなわち激しい就職難でございます。(中略) この就職ということが何を青年に要求するか。先ずよき成績すなわち学校の点数でございます。次には各会社のより好むタイプでございます。すなわち、人間の型でございます。(中略) かかる息づまる空気の中で青年がもがいているのがどうすることもできない実情でございます。かかる情勢において、青年たちが商品化し一つの性格をつくりあげつつある間に、失ってゆく多くのものがあることを考えなければなりません。そして、失った空虚がいまだいずれの時代の青年のもった空虚よりも大きな異なったものであることも考えなくてはなりません。

「青雲の志」をもち、「社会的な理想も自由に吐露」しえた時代、才気と独立心が旺盛な、条規によって容易に律せられない「倜儻不羈」の精神をもった第一期の青年。そして、外国の知識を吸収することに急ぐ反面、一般民衆とは乖離したドイツ的な理想主義に浸る第二期の青年。さらに、戦後恐慌(1920年)、金融恐慌(1927年)、満州事変(1931年)にぶつかって社会制度はその度に硬化し社会不安が加わってくる時代、就職難から自らを型にはめ商品化せざるをえない第三期の青年、と各期を類型化して説明する。もちろん、様々な市民的自由が欠落した状況にある一般民衆にとって、社会不安は学者やインテリの青年と同様に加わってくるのであり、青年らの空虚など想像する余

裕もなかっただろう。まして、京大事件に象徴される大学の自由が市民的自由につながるものだという意識も希薄だったように思う。むしろ、久野がいうように、言論・集会の自由が閉塞した時代にあって、支配階級による政治的なプロパガンダの方が民衆の「俗耳」に入りやすかった<sup>(14)</sup>。また、青年の三つの類型化、特に第二期の「一般民衆～遅れた頭」などの表現は、読み方によっては、自らの立場に無自覚な啓蒙主義的知識人による、インテリ青年らに同情的な愚民観の表現と取れなくもない。しかし、中井が単なる啓蒙主義的知識人だったとしたら、京大事件の際、文学部における弾圧反対の運動に、久野収ら学生の頼みに応じて立ち上がることもなかっただろうし、京都帝国大学文学部講師の職を失うことにつながる『世界文化』や『土曜日』の創刊にも関与しなかったはずだ。

また、この1930年代、民衆は生活上の余裕もなく戦争に向かう時代だった。大恐慌による農村部の疲弊、窮乏は目を覆う状況にあり、都市部には、東北地方や日本海側の農村から身売りされてきた娘たちがあふれていた、と久野は述べている。その都市部には、暗く絶望的な現実の裏に、現実から目をそらしたエロ・グロ・ナンセンスが流行していた。表面上、確かに、都会の民衆は、エロ・グロ・ナンセンスに乗り、ジャズをスイングし、流行歌や映画に自らの身をまかせていたが、民衆、とりわけ全人口の60%に及ぶ地方の農民は、エロ・グロ・ナンセンスに身を任す余裕すらなかった。コミュニケーションと自由の視点からすると、都市部に流行したエロ・グロ・ナンセンスを表現した様々なメディアに関してどう評価するかという問題があるにせよ、今は、コミュニケーションの閉塞状況と囲い込まれた一部の「自由」しかなかったという点を押さえておきたい。

## 2. 2 1930年代のマスメディア状況

前節に見た世相、民衆の大半に生活の余裕などなかった時代に、マスメディアはどのような様相だったのだろうか。今日のように、マスメディアがマス・コミュニケーションの手段として日本全土のコミュニケーション環境を覆い尽くした状況とは違っていた。その状況に関して、山本武利の論考<sup>(15)</sup>などを参考に概観する。



山本は、1910～30年代のマスメディアに関して、①活字メディアの浸透、②ニューメディア（映画、ラジオ、紙芝居）への接触、③オーディエンスの重層化、という三つの特徴を論じている。第一次大戦後、大阪型の報道新聞（『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』）の支配が一層強まってくる。都市への人口集中や都市労働者の増加に即して、大衆社会・大衆文化現象が顕在化し、新聞は大衆的報道新聞へと展開していく。また、講談社が1925年に創刊した雑誌『キング』は、100万部をこえる発行数が定着し性別・年齢・地域・職業を問わず幅広い読者の支持をえたという。掛川トミ子によると、戦前の講談社による「講談社文化」と称された活動は、“娯楽の構造と機能をもって文部省の及びがたい国民教化活動を情熱とエネルギーをこめて主体的に推進”し、官立文部省が最終的には娯楽の制限と抑圧を志向したのに対して、「私設文部省」（徳富蘇峰）の機能を果たしたという。そして、『キング』創刊を機会に、『雄弁』（1910年創刊）を発行していた大日本雄弁会（硬のジャンル）と『講談倶楽部』（1911年創刊）を発行していた講談社（軟のジャンル）の社名が統合され大日本雄弁講談社となり、創立者の野間清治は、「日本一おもしろい、日本一ためになる、日本一大部数！」という発売のキャッチフレーズを元に100万部雑誌を実現し、「日本の雑誌王」を自称するようになる<sup>(16)</sup>。同じく、1917年創刊の『主婦之友』（主婦之友社）、1920年創刊の『婦人倶楽部』（講談社）も、購買力を増した女性読者に対応した戦略を形成し、1930年代にはそれぞれ100万部をこえる雑誌に成長している。そして、1930年代後半になると、これらごく一部の資本による活字メディアの市場支配が強まっていく。

さらに、大阪系の新聞社が、『週刊朝日』（朝日新聞社、1922年創刊）、『サンデー毎日』（毎日新聞社、1922年創刊）といった週刊誌を開発している頃、技術的には活字メディアと根本的に異なるメディアが現れる。映画・ラジオ・紙芝居がそれである。中井が注目した映画は、彼の注目した点とは別に、1930年代のトーキー時代になって全国の農村の映画人口が増加する。文部省の全国都会娯楽愛好調査によると、芝居や浪花節を押さえて、最も好きなものの一位（33.1%）だという。また、1925年に放送開始したラジオは、受信機の高価格や受信性能が低かったこと、社団法人日本放送協会（NHK）の



放送内容に娯楽が少なかったことなどから、普及率が伸びなかった。しかし、加藤秀俊は、全国に組織された「ラジオ体操の会」を例にあげて、ラジオというニューメディアが果たした機能とその風景を述べる。すなわち、1939年にはラジオ受信機の普及台数が500万台、全国の世帯の約50%を越えており、新聞・雑誌などの活字メディアが、モノとして読者の手に届くためには物流、交通手段が不可欠だったのに対して、ラジオの電波は瞬間にして全社会を蔽うため、地理的制限がなく同時に同一の情報提供が可能だったという<sup>(17)</sup>。ただし、そのことは、後の1940年代の戦況報道に見られるように、ラジオ放送が開始当時から政府による上意下達のためのメディアとして機能したともいえる。そして、1930年代から後、有力紙誌の読者、映画・紙芝居の観客、ラジオの視聴者といったオーディエンス（受け手）が互いに重複し重層化し始める。ただし、この時期、民衆の消費生活のレベルは低く、オーディエンスの重層化といっても、都市部を中心とした上層・中間層に限られていた。

なお、コミュニケーション史の視点からすると、加藤秀俊が明治期のナショナルリズムとコミュニケーションについて論じたように、マスメディアオーディエンス状況を含み込んだコミュニケーション環境を広く俯瞰すべきだろう<sup>(18)</sup>。メディアの受け手に関しては、統一的なシンボル操作を教え込む学制などの様々な教育制度普及・浸透の度合い。これは、別稿に取り上げたりテラシーと読書の位相を追究するためには不可欠な要素だと考える<sup>(19)</sup>。そして、メディア環境という点からは、道路・鉄道・旅行（「洋行」も含む）といった物理的な交通の整備と郵便など通信制度の整備があげられる。ただし、本稿の目的から逸脱するため、これらの諸点は、関連する課題としておく。

### 3. コミュニケーション史の隘路

#### 3. 1 「委員会の論理」の形成過程

「委員会の論理」の形成過程というと大仰な表現だが、「委員会の論理」の内容展開や使用されている概念・表現を見ると、その前の時期に執筆された諸論文に表現や取り上げている思想家、モチーフの重なる点が多い。それ

ゆえ、従来の中井論が取り上げている関連論文に言及しておきたい。なお、論文の書誌的な表記は、「論文名」、『掲載誌』、発行年月次、(全集・巻 ページ)、の順として列挙する。

まず、辻部政太郎は、「委員会の論理」について「それまでに発表してきた諸論考と、微妙に有機的にかみ合っているから」深く読み込むのが難しいと述べ、直接、関係が深い論文として次の4論文をあげている<sup>(20)</sup>。

「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」『哲学研究』1929.2  
(全集1 250-263)

「機能概念の美学への寄与」『美・批評』1930.9 (全集1 159-206)

「模写論の美学的関連：一つの草稿」『美・批評』1934.5 (全集1 5-20)

「Subjectの問題」『思想』1935.9 (全集1 21-45)

また、池田浩士は、「委員会の論理」は中井のユニークな組織論として読まれているけれども、彼の組織論は言語論での考察と立論をそのまま引き継いでいるとして、言語論に関する下記の二論文をあげている<sup>(21)</sup>。

「言語」『哲学研究』1927.9、1928.4 (全集1 209-249)

「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」『哲学研究』1929.2  
(全集1 250-263)

辻部、池田があげている関係論文は、「委員会の論理」と同じく全集1巻に収録されており、関連する著作を同じ巻に収録するという全集の一般的な編集スタイルからすると当然の配列だといえる。さらに、中井の論文のうち、筆者も関連があると思うのは、下記の三論文だろう。

「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」『哲学研究』1930.2 (全集1 264-274)

「思想的危機における芸術ならびにその動向」『理想』1932.9 (全集2 43-142)

「合理主義の問題」『学生評論』1937.3 (全集1 123-142)

それから、全集とは異なるが、鈴木正が編集した『美学的空間』(増補版1982年)に「講座芸術学」という論文が収録されている。これは、元々、『児童藝術研究』という雑誌の7号(1936年2月号)～13号(1937年10月号)に連

載され、現在はその複製版が発行されている<sup>(22)</sup>。「委員会の論理」が『世界文化』に、上（1936年1月号）・中（1936年2月号）・下（1936年3月号）と発表されたことから、先行する関連論文というより、同時期の執筆論文といえる。鈴木は、編集の「あとがき」にこう述べている<sup>(23)</sup>。

芸術の弁証法的機構を全面的（歴史的＝論理的）に把握しようと試みた、（中略）これは「委員会の論理」と基本的に同じモチーフを「感情的領域」において展開したものである。奴隸制・封建制・商業性の崩壊による文化形式（ここでは芸術学と感情論）の三つの転換を貫いてあらわれる〈自然〉〈技術〉〈芸術〉の弁証法的対立概念を終始、否定を媒介に他の概念に推移する過程として構成しているのが、この論文の最大の特徴である。

この「講座芸術学」は、『児童藝術研究』の13号（1937年10月号）に掲載されたものが最終稿、未完となっている。つまり、1937年11月、中井を含む『世界文化』グループが治安維持法違反に問われ投獄される直前の時期に終わっている。

これら「委員会の論理」に結実する中井の前段階の諸論考群は、追従主義的な西欧思想の単なる受容・吸収と異なって、中井の自力による思想的な格闘の表現と見て取れる。ただ、20世紀も後半になってようやく気づくことなのかもしれないが、中井が格闘した西欧の19－20世紀前半的な学知には、当然のことながら西欧的な歴史性と限界があった。すなわち、真理を普遍的なものとする西欧的なローカリズムの普遍化、その後の合理的理性に対する懐疑、20世紀大衆社会の労働・生活の変化、生産システムに即した人間観の変容、などの歴史的な状況だ<sup>(24)</sup>。「委員会の論理」の細部や関連諸論文を見ていると、中井はこれらの歴史性に気づいていたように思える。気づいていたからこそ、西欧思想の受容、祖述のスタイルをとらず、『世界文化』誌に世界的な一流レベルの論文を載せようと格闘したのでろう。しかし、現在の時点から俯瞰すると、格闘したフィールドの限界が見えてくる。一例をあげるなら、カッシーラーの機能概念を援用した「委員会の論理の基礎模型の完成」（第9節）として、実体概念から機能概念への転換を述べている点、有名な「窓」を例にした機能概念の説明だ。すなわち、実体概念としての「窓」

は一般的な表象なのに対して、機能概念としての窓は、「住む」という目的活動に即した通風や展望といった機能を果たす関数的複合体なのだと中井はいう。けれども、そのような事態は、人間が窓に対して通風や展望といった機能をもつように、関係的に対応する限りにおいて成立するものだろう。中井の説明は機能概念を援用してはいるものの、「機能」自体を実体論的に扱った実体論に読めてしまう。そこには、人間と物との相互の関係論的な視点が欠けていると考える。つまり、端的にいつてしまえば、普遍化された「西欧的なローカリズム」の発想の枠組みを相対化していない。本稿における詳論は避けたいが、中井は「19世紀型学知」というべきフィールドの内側にいて、格闘していたように思う。

ところで、論文のタイトル「委員会の論理」は、なぜ、「委員会」なのだろうか。今、この論文のコミュニケーション論的「読み」の可能性を考える際に関係すると考えるため、少し触れておきたい。この論文は、従来、集団的主体の実践の論理を正面からあつかったものと評価されている<sup>(25)</sup>。その集団的な主体を意味する表現が、なぜ、「委員会」なのか。久野は、執筆当時の事情に関して、下記のように言及している<sup>(26)</sup>。

彼は、彼の立場が個人主義のアトミズムに代えるに委員会のアトミズムをもってする結果にならないかという私の幼稚な疑問に答えて、『委員会の論理』は、そう公言すると弾圧にみまわれるが、実は『五カ年計画』の民主性を支える『ナロードナヤ・コミーシア人民委員会の論理』なのだから、決してそうはならないと何回も駄目をおした。

久野はさらに、「委員会の論理」の「委員会」は普通名詞の委員会ではなく、中井が述べた「人民委員会」の委員会だとする。そして、「委員会の論理」は「人民委員会」の批判的自覚化だからこそ、すべての委員会の批判的論理化になりうるとして、関係は逆ではない点に注意すべきだという。それゆえ、戦後の現在の状況にあつては「委員会の論理」は「市民糾合」を支える「市民委員会」の論理という問題に転化してくるのであり、戦後すぐの時期、広島県文化協会を中心に展開した集団の実践は、この線上に立つ運動だったとする。しかし、中井は、このような実践を媒介にして「委員会の論理」を発展していく意向をもちながら、果たすことなく世を去ってしまう<sup>(27)</sup>。

上記、なぜ「委員会」なのかという疑問に対する久野の説明を要約してあげた。個人主義やアトミズムに関する学問的な議論は別として、タイトルの「委員会」は、確かに久野が説明する通りなのだろう。しかし、たとえその通りだとしても、現代の読者感覚からすると、「委員会の論理」という表現はなじみにくい。そして、その大きな理由のひとつとして、代表的委任システムの空洞化や官僚化があげられる<sup>(28)</sup>。さらに、なにゆえ代表的委任システムの空洞化や官僚化が生じるのか、それは、「委員会の論理」に潜む欠陥のせいなのか、といった疑問も生じてくる。この疑問に関しては、序にも言及したように、筆者は交通概念を軸としたコミュニケーション論の重要な要素となる言語、あるいは言語と主体の問題が絡むと考えている。

### 3. 2 中井正一の位置：コミュニケーション・クリティック

中井が東京に来て図書館の諸活動に苦闘し、図書館法が制定公布（1950年4月30日）となった同じ時期、京都大学の人文科学系のグループがルソーに関する論集を公表した<sup>(29)</sup>。その中に、文化史の一部門としてのコミュニケーション史、人々が互いに意志を伝える方法の歴史、に関する論考がある。鶴見俊輔らによる「ルソーのコミュニケーション論」という論文だ<sup>(30)</sup>。中井自身は、当然のことながら「委員会の論理」において、戦後使われ始めた「コミュニケーション」という言葉は使っていない。しかし、いくつかの中井論が主張するように中井の諸論文は、コミュニケーション論的な性格を強くもっているといえる。もっとも、18世紀中葉のフランスにおいて教育論や社会論、芸術論、言語論と多領域に渡って活躍した思想家のルソー (Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778) と20世紀前半、閉塞的なコミュニケーション状況の日本において活動した美学者の中井を同列に論じるのは、飛躍し過ぎて無理があるかもしれない。けれども、両者はコミュニケーションという点において、いくつかの接点があると考ええる。ただし、鶴見らのルソー論に展開するコミュニケーション論は、1951年当時の学問的な成果を背景にもち、通信伝達モデル的な意味合いが強い。たとえば、モリス (Morris, Charles W.) の記号論を援用して、記号によって別々の有機体の間に共通の意味を呼び起こすことをコミュニケーションと定義している。その定義に異論や問題点は

あるにしても、その接点を中心に見てみたい。なお、直接の引用は原文通り「コミュニケーション」と表記する。鶴見らは、音楽、詩、絵の歴史について、これまで総合的に扱った仕事がないとして次のようにいう<sup>(31)</sup>。

コミュニケーション史とは、音楽や詩や絵をそれらの交流において特徴づける上で便利であるのみならず、(中略)それぞれの時代の残す音楽や詩や絵は、同時代の民衆の行った鼻歌や調子づいた言葉やラクガキなどの上に積み重ねられたものであって、いわば、それらのより洗練された産物である。いま、コミュニケーション史によって、両方の層にぞくするものを共に把握するならば、それは各時代の音楽や詩や絵を、その生成発展の過程においてとらえることとなろう。

そして、人間がもつ記号(もっとも複雑になったものが言語)は、だんだんと多様化して発達し、それぞれの時代において種々雑多の名前がついた様々な「コミュニケーションの道路」(様式)を作る。しかし、コミュニケーションの歴史において、これまで通用してきた道路に不便が感じられるようになる。これを「コミュニケーション(史)の隘路」という。続いて、ルソーのように、コミュニケーション史上の過渡期にあつて、その時期のコミュニケーションの取るべき道筋をあらたに設計して示す人々を「コミュニケーション・クリティック」(通信の批判をする人)と呼ぶ。また、既成の文化がコミュニケーションによって、広く人々に配給されるのではなく、“文化はコミュニケーションの過程において生じ、コミュニケーションの仕方は、文化の性格を強く規定する“という<sup>(32)</sup>。さらに、ルソーは、18世紀フランスのコミュニケーション史の隘路に対して、時代の要請に答えて、(サロンの)会話、手紙、演説、対話、独白、小説、詩、音楽劇、辞典、批評、作曲、学術論文など、といった諸道路を設計した。すなわち、コミュニケーション・クリティックとして偉大だったと評価している。それから、今日(1951年当時)において、コミュニケーション・クリティックの第一人者と考えられるのは、デューイ(Dewey, John, 1859-1952)だとしているのは興味深い。ただし、彼の仕事は、芸術、教育、政治など多くの領域におけるコミュニケーション批評に及んではいるが、その主張は原理的であつて教育外の領域においては実践と結びついていない。

一方、中井は、西田幾多郎ら京都学派と称される学者らがいる京都帝国大学に美学を学び、恩師の深田康算らアカデミズム美学の後を継ぐ者として嘱望されていた。しかし、単なるアカデミズムの美学者と違って、映画からスポーツ（ラグビーやボート）、探偵小説、ジャズにも美学的意味を探究しようとした風変わりなスタイルの美学者だった。引用したルソー論に即しているなら、コミュニケーションの諸道路に敏感な、躍動する好奇心をもった人物だったといえよう。中井は、確かに、ルソーほど多岐に渡るコミュニケーションのメディア（諸道路）を創造しなかった。とはいえ、デューイと同様、「委員会の論理」はコミュニケーション批判の論理と捉えられるし、『土曜日』などの実践にも結びついていた。つまり、中井は、文化の性格を強く規定するコミュニケーション（史）の隘路を痛感していたがゆえに、「委員会の論理」を執筆し『土曜日』や戦後の広島における地方文化活動に係わったのだと考える。その意味において、中井の位置は、ルソーと同じくコミュニケーション・クリティックといえるだろう。

また、「委員会の論理」と『世界文化』に関連して、久野収の次のような証言がある<sup>(33)</sup>。

『世界文化』を創刊したとき、ぼくたちには、文化的ヴィジョンを形成して政治的闘争に本当に生かされる文化を研究し追究しようという意図があったと思う。（中略）文化が政治に利用される道具ではなく、政治のヴィジョンの形成を助け、政治への影響力を及ぼしうる自立性を評価した点は『世界文化』の水準のかなりの高さを示していますが、そこで扱われた文化は、いわゆる大衆文化までを含んでいなかった。

むしろ、『世界文化』の前誌、『美・批評』の編集スタイルに、民俗美や大衆美、映画やドイツのノイエザッハリヒカイト、バウハウス、機械と芸術の交流運動を扱うなど、主宰者、中井の大衆文化に対する考え方が表われていた。さらに、『土曜日』になると、中井の大衆文化につながる編集方式が明確に表われる。すなわち、“民衆の眼、感覚を通して事柄をコミュニケーションする方に重点が置かれていた”<sup>(34)</sup>。そして、久野は「委員会の論理」について、1980年代の視点から次のようにいう<sup>(35)</sup>。

現代の文化は、社会と技術が芸術の領域を浸潤していくとともに、創作



も鑑賞も集合化し、共鳴化してゆくところにその核心がある。中井正一は、その集合文化の原方向と共通の根源を自覚したやり方を求め、(中略)「委員会の論理」を書いた。

つまり、個人が集団を組み、ものを相互に使用価値のために創作し鑑賞する社会をつくることが重要なのであり、そのための先駆的活動として文化運動を捉えた点に中井の偉さがあった。

上記に言及した中井の位置が、コミュニケーション・クリティックだと仮定して、話をコミュニケーション史に戻したい。筆者が中井正一とコミュニケーション史を論じるに当たって、ある書物が思い浮かぶ。冒頭、「この物語の主人公はごくふつうの人間たちです」という印象的な文章から始まる『コミュニケーション物語』という書物だ。この書物の筆者、竹内成明は、「あとがき」に、コミュニケーション史の領域において中井の「委員会の論理」を越える理論はまだないと評価する<sup>(36)</sup>。本稿の問題意識と視点もその延長線上にあるのだが、「委員会の論理」再考に向けて注目点を述べておきたい。それは、中井自身は使っていない「コミュニケーション」概念と中井が人々の日常の営みのなかに求めようとした「批判性」・「協同性」の問題だ。つまり、「委員会の論理」は、“論理の歴史をとりあげた中井の観点は、論理を、協同様式の危機における理性の相互的な働きとしてとらえることにあった”<sup>(37)</sup>と捉えられる。また、“対話の論理の到達点であった”<sup>(38)</sup>という捉え方もある。すなわち、「対話」において、自己の意見に対する「確信」がなければ、相手の意見に容易く従うだけの順応主義になり、自己の意見に対する「否定」がなければ、異なる意見をもつ相手を拒絶するだけの教条主義になる。それゆえ、自己の意見を否定的媒介として提示し、異なる意見をもつ他者との対話を通じて協同性を形成していく論理が重要になる。それが「委員会の論理」だとする<sup>(39)</sup>。歴史において、「ごくふつうの人間」も主人公だ、その主人公たちがいかにして「対話の論理」あるいは、対話のための言葉を獲得しうるのか、そして、「委員会の論理」はそのための設計図だったはずだ。これらの注目点に関する詳論は、次稿に扱う。

## まとめに代えて

序にも述べたように、本稿の目的は、コミュニケーション史の視点から「委員会の論理」再考の準備作業を行うと同時に、中井による「コミュニケーション史の構想」の可能性を追究することだった。「委員会の論理」を読み込むに際して、なぜ、コミュニケーション史なのか、という批判も受けそうだが、問題意識として、中井の諸著作に見られるコミュニケーション史的な性格<sup>(40)</sup>に拘りがあったからというしかない。一般に、史学は、一部の思想史などを別として、交通史や流通史など物理的なモノの交通は扱うけれども、精神的な交通、コミュニケーション的現象を扱わない。他方、合理主義的なコミュニケーション論は歴史を扱わない。その両方への不満があったからだ。

また、筆者が本稿のような問題意識をもった背景には、一部の中井論に対するある種の違和感があった。それは、中井が実践した図書館活動が「委員会の論理」の応用だという評価に関するものだ。すなわち、中井の戦後における国立国会図書館副館長などの諸々の図書館活動は「委員会の論理」の応用だと、図書館や図書館情報学の関係者も含めて言及している点だ<sup>(41)</sup>。もちろん、それらの評価はある面において正しいと考えるし、否定的な異論を述べる根拠もない。しかし、『土曜日』に関連する実践活動ならともかく、図書館の活動は「何か違う」という気がしていた。戦後の図書館学から今日の図書館情報学における図書館のコミュニケーション・システムは、簡略に述べるなら、「利用者－資料－司書」による動的なコミュニケーション・システムの提示だといえるだろう。さらに、中井が取り上げた空間的な「トポス」の概念（「委員会の論理」第2節）も含めるなら、コミュニケーションが生成する図書館という空間を考慮してもよいだろう。むしろ、その背景には、アングロ・サクソンのあるいは、アングロ・アメリカ的な図書館学の発想があるだろう。それに比べて、中井が「委員会の論理」において展開したコミュニケーション論は、独自の歴史意識に基づいた弁証法的なコミュニケーション史的構想だと考える。それゆえ、筆者は、「委員会の論理」を図書館の実践に引き付け過ぎた「読み」によって、「委員会の論理」自体の可能性を過小評価してしまうのを懸念する。

もう一点、従来のメディア史を含むコミュニケーション史的な叙述に関する違和感もあった。もちろん、何をもちてコミュニケーション論（史）と定義するか議論もありうるだろう。しかし、モノとしての書物の歴史をいくら追求してみてもメディア変遷史の枠組みを越えることはない。一方、コミュニケーションに言及していても、人間の生の営為に関わるコミュニケーションへの言及がほとんどなく、あったとしても大半は、シャノン（Shannon, Claude E.）やウィーバー（Weaver, Warren）らの系列にある通信伝達モデルの情報理論、コミュニケーション論、システム論でしかなかったように思う。むしろ、意味伝達や情報交換としてのコミュニケーションとは違って、あらたな「意味連関」の形成や序に言及した「交通」概念に関連する相互行為的なコミュニケーションに注目していくことが重要だろう。要するに、従来のコミュニケーション史の叙述からは、人の生活、人間の生の営為が見えてこない。すなわち、人間の生の営為に注目した人間観、史学の基礎にあるはずの人文科学的な人間観が欠如していると感じる。それが、個人的な違和感の原因なのだと思う。

本稿は、「委員会の論理」再考のための準備段階の作業として提示した。なお、「委員会の論理」の内容展開や中井が執筆した他論文の内容と関係には言及していない。特に、「委員会の論理」下降図式（第16節）の主たる議論点となる言語と主体性の概念や相互行為の問題をまだ扱えていない。これらの点は次稿に論じることとしたい。

## 注

- \*本文中、外国人名のカタカナ表記は、『岩波西洋人名辞典』（岩波書店、1981年増補版）に従った。
- (1) 中井正一〔著〕、長田弘編『中井正一評論集』岩波書店、1995、p.402.
  - (2) 久野収編『美と集団の論理：中井正一』中央公論社、1962、p.295.
  - (3) 久野収『ファシズムの中の一九三〇年代』リポート、1986、p.203.
  - (4) 内田弘「三木清『構想力の論理』の問題像・形成過程・論理構造」『専修経済学論集』2009、Vol.43、No.3、p.1-43.
  - (5) 鶴見俊輔「序論コミュニケーション史へのおぼえがき」『コミュニケーション

- ン史』江藤文夫〔ほか〕編，研究社出版，1973，p.4-21.
- (6) 前掲(5)
- (7) 鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケーション論」『鶴見俊輔著作集第1巻』筑摩書房，1975，p.420-439.  
著作集に収録のこの論文は、『思想』397号（1957年7月号）に掲載されたもの。
- (8) 香内三郎「交通」『マス・コミュニケーション事典』南博監修，学芸書林，1971，p.229-231.
- (9) 後藤和彦「コミュニケーション史の研究史」『コミュニケーション史』江藤文夫〔ほか〕編，研究社出版，1973，p.[193]-230.
- (10) 前掲(9)，p.224.
- (11) 久野収「京大・瀧川事件をめぐって」『発言』晶文社，1987，p.151-190.  
上記は，松尾尊兌、久野収両氏の対話を収録したもの。
- (12) 前掲(11)，p.189.
- (13) 中井正一〔著〕，久野収編『文化と集団の論理』（中井正一全集第4巻）美術出版社，1981，p.7-16.
- (14) 前掲(11)，p.159.
- (15) 山本武利「特論マスメディア論」『岩波講座日本通史18巻』岩波書店，1994，p.[289]-303.
- (16) 掛川トミ子「講談社」『マス・コミュニケーション事典』南博監修，学芸書林，1971，p.228-229.
- (17) 加藤秀俊「1930年代のコミュニケーション」『文化とコミュニケーション』思索社，1977，p.186-204.
- (18) 加藤秀俊「明治二〇年代のナショナリズムとコミュニケーション」『明治前半期のナショナリズム』坂田吉雄編，未來社，1958，p.[311]-342.
- (19) 中村保彦「中井正一と『土曜日』のジャーナリズム」『同志社図書館情報学』2009，20，p.94-106.
- (20) 中井正一〔著〕，久野収編『哲学と美学の接点』（中井正一全集第1巻）美術出版社，1981，p.453-454.
- (21) 池田浩士「Vマス・メディア状況の言語表現」『講座20世紀の芸術5』

岩波書店, 1988, p.[241]-286.

- (22) 大阪国際児童文学館編『児童藝術研究』復刻版, 久山社, 1986, 1冊.
- (23) 鈴木正「増補版あとがき」鈴木正編『美学的空間』増補, 新泉社, 1982, p.411-414.
- (24) 内山節「合理的思想の動揺」『普遍と多元』(岩波講座世界歴史28) 岩波書店, 2000, p.153-174.
- (25) 前掲(2)
- (26) 前掲(20), p.461-462.
- (27) 前掲(20), p.462.
- (28) 竹内成明『闊達な愚者: 相互性のなかの主体』れんが書房新社, 1980, p.143.
- (29) 桑原武夫編『ルソー研究』岩波書店, 1951, p.401.  
この第一版、桑原武夫の「序言」の日付は1950年12月になっている。
- (30) 鶴見俊輔, 多田道太郎, 樋口謹一「第9章 ルソーのコミュニケーション論」『ルソー研究』桑原武夫編, 第2版, 岩波書店, 1968, p.227-257.
- (31) 前掲(30), p.227.
- (32) 前掲(30), p.229-230.
- (33) 池田浩士, 久野収「Ⅸ ファシズムと大衆文化」『ファシズムの中の一九三〇年代』久野収編, リプロポート, 1986, p.191-192.
- (34) 前掲(33), p.193.
- (35) 前掲(33), p.200.
- (36) 竹内成明『コミュニケーション物語』人文書院, 1986, p.298.
- (37) 前掲(28), p.212-213.
- (38) 長妻三佐雄『公共性のエートス』世界思想社, 2002, p.247.
- (39) 前掲(38), p.249.
- (40) 前掲(5)
- (41) 酒井悌「副館長就任まで」『[文化と集団の論理] 付録』美術出版社, 1981, p.16-19.  
桂英史『インタラクティブ・マインド』岩波書店, 1995, 221p.

(なかむら やすひこ。2010年5月25日受理)